

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	金成 祐人
主 論 文 題 名： 前期ハイデガーにおける世界と自然の問題				
(内容の要旨) 本論文は、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの前期の世界概念を、自然概念との連関から解明し、その哲学的意義を明らかにすることを目的とする。ハイデガーは、その初期講義において「生」と「世界」が切り離されない「生世界」というあり方から「事實的生」の思索を展開して以来、後期に至るまで「世界」概念を導きの糸として思索を展開してきた哲学者である。その世界概念は、前期の「世界内存在」から後期の「四方界」まで、哲学内外に様々な影響を与えてきた。こうしたハイデガーの世界概念に関して、これまで多くの研究がなされてきたが、前期の思索に限っても、以下の二つの理由で世界概念の全体像の解明は果たされていないように思われる。 第一に、「世界とは何か」を問う三つの道の連関が未解明である。ハイデガーは『存在と時間』後の1929/30年冬学期講義「形而上学の根本諸概念」において、「世界とは何か」を問う三つの道を提示し、そのうちの一つとして『存在と時間』の世界論を位置づける。このことは、『存在と時間』の世界概念とその後の世界概念が、単に変更されたのではなく、より包括的な視座で統一的に捉えられ得ることを意味する。そのため、前期ハイデガーの世界概念の全体像の解明のためには、残りの二つの道と『存在と時間』で試みられた道が、どのような連関にあるのかを明らかにしなければならない。しかし、ハイデガー自身はこの連関を説明してはおらず、管見の限り、先行研究でもこの連関が論じられていない。 第二に、『存在と時間』後のメタ存在論における「全体における存在者（das Seiende im Ganzen）」としての自然の位置づけの問題がある。上記の講義において、世界概念は「全体における存在者としての存在者の開在性（存在者が存在者として全体において開在していること、die Offenbarkeit des Seienden als solchen im Ganzen）」として規定されるが、この規定のなかには「全体における存在者」としての自然が含まれている。すなわち、世界概念の解明のためには、必然的に「全体における存在者」としての自然の解明が果たされねばならない。しかし従来の研究では、『存在と時間』後の「全体における存在者」を論じる形而上学的立場に対し、否定的な位置づけを与えるものも多かった。この時期の思索は、中期思想への過渡期であり不明確なもの、自然が論じら				

れているが統一的に把握されていないもの、現象学から切り離すべきもの、不整合な立場として登場して間もなく放棄されたもの等として解釈されてきたのである。しかしながら、「全体における存在者」を主題とするメタ存在論に対するこうした過小評価は、「全体における存在者」をその規定のうちに含む世界概念の理解を妨げてしまうものである。そのため、メタ存在論の由来・内実・射程を再検討しなければならない。

以上のように、前期ハイデガーの世界概念と自然概念の全体像の解明はいまだ十分になされておらず、またそのために初期・中期の両概念との差異についても明らかになってはいない。このことは、前期ハイデガーの世界概念と自然概念の哲学的意義が十分に明らかになっていないことを意味する。本論文は、以上のような問題関心のもと、前期ハイデガーの世界概念と自然概念に焦点をあて、前後の時期との差異を明らかにするなかで、それらの全体像の解明を課題としている。

以下では各章毎の概略を示す。

第1章Aでは、『存在と時間』より前のハイデガーの世界概念を論じた。1919年戦時緊急学期講義「哲学の理念と世界観問題」における、学による理論化に先立つ周囲世界体験を取り上げるとともに、ハイデガーが世界的なものに先立つ前世界的なものを「体験可能なもの一般」として語り出していることに着目した。そして、体験可能なもの一般としての意味から私にとって意味があるものとして体験されることへの移行を「世界化（welten）」の内実として解釈した。また、1919/20年冬学期講義「現象学の根本問題」では、「前世界的なもの」をめぐる問題は背景に退き、前理論的で世界的なものが日常的なあり方（即自的な生）と根源的なあり方（即自的かつ対自的な生）に区別され、後者が生の根源層とみなされていることを確認した。同講義では、生世界が「周囲世界」、「共同世界」、「自己世界」の相互浸透として描かれるが、客観化を避け「あり方（Wie）」を際立たせる自己世界の先鋭性によって生の根源領域に到達しうるとされる。そして、この自己世界の先鋭性は気分への着目によってこそなされるものであることを示した。前世界的なものから世界的なものへの移行を示す「世界化」、「あり方」を示すための自己世界の先鋭性と気分への着目は、形を変えて『存在と時間』後の思索に継承されることになる。

第1章Bでは、『存在と時間』より前のハイデガーの自然概念を論じた。アリストテレスを受容する時期においては、ピュシスは「それ固有の可能性に基づいて、おのずからそれ自身であるような存在者」とであるとされ、生成したものとしてのピュセイ・オンと、恒常的なものとしてのピュセイ・オンが区別されていた。後者はその恒常性ゆえに「神的なもの」とされ、「全体における存在者」とも呼ばれて前者の基礎づけを果たす

ものである。アリストテレスにとって、こうした「全体における存在者」（自然）への通路は「驚き」によって確保され、自然の観取がソフィアとされる。ただし、人間は神的ヌースと異なり、ロゴスを通じてのノエインのみ行うことが可能である。他方、この時期にはアリストテレス解釈とは別に自然概念の検討も行われている。そこでは、理論的態度による非世界化を通じた実在性としての自然と、私たちが日常的に配慮している有意義性の指示連関に組み込まれた自然が語られている。しかし、ピュシスは徐々にこうした人間による把握と結びつけられた自然とは区別されるようになる。1926年夏学期講義では、初めて「メタ存在論」という言葉が現れ、「神学」や「全体における存在者」と共に語られるようになる。そして、アリストテレスによる存在論と神学の結びつきが「製作」という観点からなされているものとして批判的に検討される。本章で再構成された『存在と時間』より前のハイデガーの自然概念は、メタ存在論期のメタ存在論としてあらためて論じられる。

第2章Aでは、『存在と時間』の世界概念について論じた。前期の思索において、ハイデガーはカントの世界概念を批判的に検討することで自らの世界概念を浮き彫りにしている。『存在と時間』においては、カントの経験的自我と純粹自我を検討することを通じて、現存在は眼前存在性に基づく無世界的な主観（自我）であるのではなく、世界を自らの存在体制に含み込んだ世界内存在というあり方をしていることが示された。次に、ハイデガーによる世界の四つの意義について確認していくなかで、デカルトの世界概念への批判がフッサールの階層構造による世界概念の構築批判に接続していることを示した。世界の成立を層の事後的な接合によって説明することは、世界とは何かの理解を前提してのみ可能であり、世界概念の解明には繋がらない。ハイデガー自身は日常的に道具を使用する場面から周囲世界という世界の実存的意義を導き出す。さらに、そうした周囲世界のアプリオリな構造として、有意義性という世界の実存論的意義を導出する。有意義性は、現存在の〈目的であるもの〉から統制され、それを究極目的とする有意義化の連関全体を示すものであり、世人自己によって分節化されるものであることを示した。また、世界の有意義性と無意義性という二つの規定は、前期ハイデガーの世界概念の不十分さを示し、統一的解釈を妨げるものだと思われることがあったのに対し、本稿は両者が矛盾するものではなく、日常性と不安という場面の違いとして統一的な解釈を提示するとともに、無意義性としての世界が『存在と時間』のなかで世界内存在という世界と現存在の一体性を示す積極的な役割を担っていることを示した。

第2章Bでは、『存在と時間』の自然概念について論じた。現存在の存在了解から出発する基礎的存在論は、現存在の〈目的であるもの〉から統制される世界という全体論的コンテクストのなかで出会うものとして、つまり世界内部的な存在者として存在者を捉

えることになる。自然も他の存在者と同様に、第一次的には道具的存在者として捉えられる。日常的に使用される道具の材料となる自然はもちろん、一見利用可能性からは捉えられない自然も、他の道具と共に目的・手段連関において周囲世界的自然として存在していると解される。他方、日常的な目的・手段連関から切り離し、理論的態度で眺めることで、自然を眼前存在者として見ることも可能である。ただ、その場合でも世界内部的な存在者として存在することを示した。他方、従来の研究でしばしば第三の根源的な自然と目されてきた、「『生きとし生ける』もの、私たちを襲うもの、風景として私たちをとりこにするものとしての自然」、「私たちを『取り囲んでいる』『自然』」についても、世界内部的な存在者であり広義の眼前存在者であると解釈した。そのため、『存在と時間』より前に論じられていた「全体における存在者」としての自然は、少なくとも「自然」という語によっては『存在と時間』では語られていないことが確認された。

第3章では、『存在と時間』後のメタ存在論期の自然概念について論じた。メタ存在論の由来・内実・射程について先行研究の状況を整理するとともに、まずはその由来について、直接的には『存在と時間』より前のアリストテレス解釈に由来することを明らかにした。またその内実について、領域的存在論であるとする解釈を退けた。次に「存在論の存在者的基礎」については、直接的には「全体における存在者」ではなく現存在を示すものであることを確認しつつ、存在論の基礎を神学において問う視点の確保として提示した。そして、「全体における存在者」の内実に関する積極的な解明として、1929/30年冬学期講義「形而上学の根本諸概念」のピュシスの規定から論じた。『存在と時間』より前の「それ自身からつねにすでに」を引き継ぐかたちで、ピュシスは「全体における存在者が自らを形成しつつ支配すること」と規定されている。このピュシスには、動植物の生長、それらが生まれることと死ぬこと、季節の移り変わり、昼夜の交替、星辰の運行、暴風雨や自然の猛威が含まれ、さらに人間に関するものとしても生殖、誕生、幼年、成熟、老化、死や、人間の運命と歴史が含まれるように、多様な自然現象を示している。ただしそれは、現存在が意味的世界のなかで理解する通常的な自然現象ではなく、私たちがまだ実存する前の中立的現存在としてその圧倒性のなかに投げ込まれているものである。このことから、「全体における存在者」は、単調で平板な未分化状態ではなく、中立的現存在をも含む多様性を有するものであることが示された。最後に、日常性においては出会うことのない「全体における存在者」に直面する仕方として、根本気分が方法的役割を担っていると解釈した。アリストテレスも「全体における存在者」へのアクセス可能性を「驚き」という気分求めていたが、ハイデガーは私たちの時代の根本気分として「退屈」を挙げる。いかなる時間つぶしも機能しない第三の深い退屈において、「全体における存在者」が開示される。また、この退屈において自己自身の

存在の仕方が他の存在者と異なる現存在であることを自覚することになるが、このことは第1章Aで論じられた「あり方（Wie）」を示すための自己世界の先鋭性と気分への着目と接続しうる議論である。

第4章では、前期ハイデガーの世界概念を分析するため、「世界とは何か」という問いを展開する三つの道の連関を解明した。〈史学的考察の道〉でハイデガーは、従来の「世界」という言葉を宇宙論的意義と実存的意義とに分けて整理していた。そこでハイデガーが見出した課題は、第一に後者の意味がいまだ経験的次元を示すに留まり、その構造の分析がなされていないこと、第二に両者の意味の連関が明らかになっていないことであった。『存在と時間』で試みられた〈私たちの日常的な世界了解から世界概念を展開する道〉は、この第一の課題に取り組んだものと見なすことができる。すなわち、単に経験的次元での周囲世界を示すのみならず、そうした周囲世界に通底する構造として有意義性を明らかにしたのである。次に、第二の課題への取り組みが〈三つのテーゼを比較考察する道〉でなされていると解釈し、そこで人間について言われる「世界形成的」について、その前身である「超越」から内実を明らかにした。『存在と時間』でも古典的な超越問題ないし認識問題と区別されるハイデガー自身の超越が論じられていたが、メタ存在論期の超越は『存在と時間』の超越とも区別されるものであった。『存在と時間』の超越が、世界をその存在体制としてすでに有している現存在が、世界内部的存在者に関わるための存在論的条件を問題とするのに対し、メタ存在論期の超越は、現存在が世界内部的ではない「全体における存在者」を乗り越えて、いかに世界を獲得するのかを問題とするからである。言い換えれば、前者の超越は「全体における存在者」をその射程に含めないが、後者の超越は「全体における存在者」を「超出されるもの」として含み、現存在を「超越するもの」、世界を「超越したもの」とした三つの契機によって世界の生起を解明するものであった。メタ存在論期の超越は、初期フラインブルク期と同様に「世界化」という術語によっても語られるが、その内実は異なっている。1919年戦時緊急学期講義で論じられた世界化は、有意義性としての世界の世界性を前提としたうえで、周囲世界において適所性をもたないものと出会ったとしても、なお周囲世界に組み込まれる可能性をもつものとして理解されることを示しているのに対し、メタ存在論期の世界化は、現存在が意味的な分節をもたない「全体における存在者」を乗り越えて、世界を獲得することを指し示しているからである。次にハイデガーは、当時盛んに論じられていた「世界観」を超越の本質規定として位置づけ、圧倒性を有する「全体における存在者」のなかで「支え」のないあり方をしている現存在が、「世界をもつ（Welt-haben）」こととして捉え直す。これはカントにおける世界の実存的意義を実存

論的に捉え直すことも解釈された。さらに「根拠の本質について」では、超越・世界観と同様の事態が「世界形成」というハイデガー独自の語で語り出される。この「世界形成」が、1929/30 年冬学期講義「形而上学の根本諸概念」の〈三つのテーゼを比較検討する道〉における、「とらわれ」の状態にある動物と、「として」構造を有し語ることとで「全体における存在者」を理解可能な世界にもたらす「世界形成的」な現存在との対比に繋がっている。世界形成・世界企投から導き出される「全体における存在者としての存在者の開在性」という世界の規定こそ、前期ハイデガーが到達した世界概念であった。この世界概念によって、「全体における存在者」のあり方を示す宇宙論的意義と、人間のあり方を示す実存的意義およびその構造を示す実存論的意義との結びつきの問題も解決される。実存する者としての私たちが日常的に生きている周囲世界（実存的意義）・有意義性としての世界（実存論的意義）は、現存在が世界を獲得し、「全体における存在者」と対決しその圧倒性を克服して語ることと、それがいかにあるか（宇宙論的意義）を確定することに先行されている。つまり、世界の宇宙論的意義は、実存的・実存論的意義の前提を明らかにするものだったのである。このことは同時に、アリストテレスの存在論と神学の二重性問題の解決ともなる。存在者としての存在者の学（存在論）が可能となるのは、神学の対象である「全体における存在者」の圧倒性を克服することが必要であった。つまり、神学（メタ存在論）は存在論（基礎的存在論）に先立っていると解釈しうる。

第5章では、「乗り越えられるもの」としての「全体における存在者」（自然）と、「全体における存在者としての存在者の開在性」としての世界という前期ハイデガーの世界と自然をめぐる思索の射程を見極め、また前期の展開としての中期の思索を解釈するため、1930 年代のテクストを分析した。「真理の本質について」では、「全体における存在者」の「隠れ（*Verborgenheit*）」が非- 真理として根源的な真理に属すとされ、前期のように「全体における存在者」が「乗り越えられるもの」として位置づけられなくなっている。それに加え、『哲学への寄与論稿』では、超越に対する自己批判ともとれる記述が見られた。そこで、「芸術作品の根源」をもとに、世界と自然の抗争を抗争のまま取り出す中期ハイデガーの思索を前期の思索と対比させて論じた。前期ハイデガーにおいては、生誕や死、人間の運命と歴史はピュシスとしての「全体における存在者」に含まれていた。そして、「全体における存在者」は超越において「乗り越えられるもの」として、乗り越える先である世界とは明確に区別されていた。それに対し「芸術作品の根源」では、誕生や死、歴史的な民族の命運は世界に含まれており、また「全体における存在者」は世界を一契機として含んでいる。さらに、前期の超越が一方向的な動性であり、かつつねにすでに完了している動性であったのに対し、世界と大地の抗争と

して捉え直された「全体における存在者」は双方向的な絶えざる動性であり、その抗争のなかで真理が見て取られた。以上のように、中期では前期までとは異なり、「全体における存在者」はもはや「乗り越えられるもの」ではなく、現存在が否応なくそこに従属しており開けの動向を有する世界を一契機として含み込み、世界と大地の抗争として絶えざる動性のなかで捉えられるものである。その意味で、前期ハイデガーの世界と自然をめぐる思索とは明確に区別されねばならないことが明らかとなった。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number	☐ “KOU” ☐ “OTSU” No.	*Office use only	Name	Yuto Kannari
Thesis Title				
The Problem of World and Nature in the early Heidegger (前期ハイデガーにおける世界と自然の問題)				
Thesis Summary				
This dissertation elucidates Martin Heidegger’s concept of the world in his early thought, specifically in relation to his concept of nature. This study explores the culmination of Heidegger’s early concept of the world in “the manifestness of beings as such as a whole” (<i>die Offenbarkeit des Seienden als solchen im Ganzen</i>), as presented in his 1929–30 lecture course, <i>The Fundamental Concepts of Metaphysics</i>, by clarifying the origin, content, and scope of nature as “beings as a whole” (<i>Seiendes im Ganzen</i>), the subject of metontology. In Chapter 1, the concepts of world and nature which were primarily employed in the period prior to <i>Being and Time</i>, are interpreted. Regarding the world, this chapter examines the meaning of the terms “it worlds” (<i>es weltet</i>) and “intensifying concentration on the self-world.” Regarding nature, it explores Heidegger’s adoption and critique of Aristotle’s theory of <i>φύσις</i>. Aristotle’s view of <i>φύσει ὄντα</i> as <i>ἀεί</i>—beings that are eternal, without generation or destruction—is treated as “beings as a whole.” However, the analysis reveals problems with Aristotle’s perspective, which approaches nature through the lens of production and <i>τέχνη</i>. Chapter 2 addresses the concepts of world and nature in <i>Being and Time</i>. It interprets Heidegger’s critique of Kant’s concept of the world, the distinctions between four world concepts, and the duality of significance (<i>Bedeutsamkeit</i>) and insignificance (<i>Unbedeutsamkeit</i>). Concerning nature, the chapter categorizes Heidegger’s concept of nature in <i>Being and Time</i> and demonstrates that it does not encompass nature as “beings as a whole,” which is distinct from innerworldly beings. Chapter 3 examines Heidegger’s concept of nature after the publication of <i>Being and Time</i>. Rejecting the interpretation of metontology as regional ontologies, this chapter clarifies that “beings as a whole” represents a diverse nature, including neutral <i>Dasein</i> existing prior to its involvement in the meaningful world. The chapter further interprets the fundamental mood as enabling the experience of this nature. In Chapter 4, building on the findings from the previous chapters, the rationale for Heidegger’s early definition of the world as “the manifestness of beings as such as a whole” is explained. This chapter discusses the manner in which world-formation, through transcendence and worldview, demonstrates that humans, unlike animals, possess <i>λόγος</i>. This capacity allows humans to apprehend something “as” something and to confront and transcend nature as “beings as a whole.”				

Thesis Abstract

No. 2

Chapter 5 discusses the concepts of world and nature in Heidegger’s later thought, highlighting their differences from his earlier ideas. It emphasizes the “concealment” (*Verborgenheit*) of “beings as a whole,” noting that, in his later works, it cannot be overcome through transcendence. Additionally, it shows that in *The Origin of the Work of Art* “beings as a whole” is understood as “the strife between world and earth,” where “beings as a whole,” including the world, exists in a state of constant dynamism. Therefore, in this context truth emerges through that strife.